

■ 編集だより

編集後記

最近、自宅のパソコンも、ダイヤル回線から、やっとケーブルでのインターネットへと切り替えた。今までは、1つの画面が現れるのに1分間画面とにらめっこしていた。バナーなど動画が入っていると更に時間がかかる。お茶をすすりながら待ちに待った画面を見つめると、クリックしたところが違って、がっかり。後戻りしてまたお茶を飲み干す。気がついたらお腹が水膨れになっていたこともあった。学会の登録、ホテルや航空チケットもホームページ上で行うようになったために、不自由を感じていた。ダイヤル回線は時代から取り残されてしまったのである。

高速インターネットに変更してからは、自宅にいながら文献検索が非常に便利になった。10年前までは考えられない事である。調べごとがあると図書館に通ったものだが、将来どこの棚に何の本があるのかまったく分からなくなるであろう。いや、図書館という存在自体の意義が問われてしまうのかもしれない。抄録を探しめぼしい論文を見つけ出し、メタ分析などして立派な論文になってしまうのである。インターネットの怖さは、直接見たり聞いたりしなくても、自宅に居ながら一挙に膨大な情報を得ることで、全てがわかってしまったと勘違いをしてしまうことである。それに、統計処理が加わると、更に相手の実態が分からなくなる。統計が苦手な私の僻みでもあるのだが、統計に溺れてしまっはいけないという戒めをいつも抱きながら研究をしていることと願っている。

この2年間に我が学会誌で、「潮流」というセクションを設けている。大先輩の先生方に以前掲載させていただいた論文を振り返っていただき、苦労話を織り交ぜながら現在精神医学を志している読者へのメッセージをこめて執筆していただいている。今や一家に1台、いや一人に1台は当たり前だが、パソコンが珍しい時代では、1つのデータを得るのに今では考えられないような地道でひたむきな努力をされていた。ただただ敬服するばかりです。そこで得られたデータに意義があるのと同等にそこに至るまでの道のりも大きな意味があると信じている。

話は戻るが、高速インターネットの検索で得られたあふれて処理できないぐらいの文献情報に埋もれないようにうまく波に乗っていくのもよろしいが、怪我をしないように気をつけなくてはならない。今の時代、インターネットなしでは生きてはいけないとまでは言わないが、使わない訳にもいかなくなっている。決して急ぎすぎず、ダイヤル回線という地道な方法でゆっくり進んでいってもいいのかもしれない。本雑誌への投稿も時流にあった論文だけでなく、流行に惑わされない大切な何かを伝えてくれる論文の投稿を望んでいる。

忽滑谷和孝